

大陸（中支）

白虎部隊従軍記

— 苦闘した兵士の群像 —

福島県 若林 保

私は白虎部隊の一兵士として昭和十七（一九四二）年十二月一日より昭和二十一年六月二十三日まで従軍して参りました。

明治四十一年（一九〇八）年六月二十六日、仙台より新兵舎若松市に移駐する。当時鉄道は郡山市止まりで軍旗を先頭にして歩いて新設された兵舎に移り、その後大正十四（一九二五）年一月二十七日世界軍縮によりて抹消された第二十九連隊と

なり、第二十四部隊となり、日支事変が起こって昭和十二年九月十八日再編となり、兩角部隊が軍旗を奉持して中支戦線に参加した部隊である。

私が入隊した第六十五連隊は、中支揚子江（長江）の中流沙洋鎮に連隊本部があり、別名「山猿部隊」または「乞食部隊」との異名をもった部隊である。精銳部隊なるが故に山の中、谷の中の難所を進行するので、目的地に到着するには安全な道路を進軍した部隊より遅れて到着した事はしばしばであった。

乞食部隊とは大陸打通作戦に参加して奥支に潜入したために着のみ着のまま、春に出発して終点の目的地に着いたのは十二月で、高山には降雪

があり、夏服を纏っている兵は恥ずかしい位であった。ボロボロの服が奮戦を物語っているからである。

補給の輸送が届かず、また途中で輸送トラックが襲撃を受け、焼かれ奪略されたトラック二台と共に運転手は連れられて行き、軍服は全部持って行かれた。最前線の兵士はボロボロの軍服をバツケ（貼り付け）をして修理に修理を重ねて着用した、まるで乞食同様な部隊集団であるからだ。

白虎隊の詞の中に「之を画き、之を文にして世間に伝う」とある。六十年前に日支事変が起り、当時生まれた子供が老人になる年である。戦争体験を語る兵も少なくなったのみならず、自分の事すらできない高齢者になり風化する時代である。老軀に鞭打ちながら文にして見ることにした。

若松連隊に入隊したのは昭和十七年十二月一日、初雪の降る季節だった。戦地要員で、毎日、

予防接種がある。「三種混合接種」「チフス」「コレラ」「マラリア」等である。点呼は毎朝六時、その後は寒稽古、鶴ヶ城の内外の駈け足をしたり、小田山で射撃訓練を受けるのである。

十二月十三日戦地に出発である。私は会津出身で、この間三回程家族に面会に来て貰った。軍用列車に乗る。鎧戸を閉めての出発である。朝鮮釜山までの船の中より、いよいよ祖国日本とのお別れだ、下関の山々が見えなくなるまで甲板に上がって、皆「未だ見える、未だ見える」と言ってみ送った。これが故国の山々の見納めか、と皆思いは同じだった。

釜山上陸、列車は貨物無蓋車であり、人間扱いされず、まるで荷物扱い同然。顔は炭粉で真っ黒に汚れ、朝鮮半島縦断三日後に、十二月十九日と記憶する、満州に入る。そこにはイギリス兵捕虜部隊が相当数いた。武装解除され飯盒を手にして飯上げの様子である。南方戦線で日本軍の捕虜になった兵士である。

満州から北支に入る。山海関通過は夜で、万里の長城は見る事ができなかった。いよいよ戦地にいった、心身共に引き締まる思い。天津から徐州を経て南京着にて、ここで数日滞在する。ここには保安隊の幹部教育をしている軍官学校もあったようだ。中山門までの駆け足も行った。

南京よりヤンマー船にて揚子江を遡る。兵站揚子にて正月を迎える。切り餅二個、僅かな「ゼンザイ」、これが戦地での初めての正月気分の味わいで、同郷の佐藤幸男と出会った。同級生である二人は草原に横になって語った。「遠い遠い所まで来てしまったな」と故郷を偲び、語ったあの時が彼とは最期の別離となった。彼は常德作戦にて戦死した。これは私が復員して知ったのである。

同時に入隊した故郷からの戦友同士、どこに生と死の運命の別れ道があったとは知る由もなく、所謂神のみぞ知っていたのであろう。彼は私の家から二百メートル位離れた所に住んでいた竹馬の

友、いつも私の脳裏の中には彼がいる。故郷で武運長久を祈願して勇躍征途につき、一年足らずで戦死した。何と言っていいのやら悲運の生涯だった。

さて揚子に上陸して行軍する。中支は雨が少なく、半年も雨らしい雨が降らない。土が軽く地埃は黄塵万丈、天に沖す。内地では想像もできない大陸である。一週間位、行軍して一月九日、沙洋鎮と言う大きな町に到着した。ここで鏡第六八〇五部隊熊谷隊に入隊する。一カ月も入浴しないため虱が自然発生し初年兵全員が虱だらけの兵士である。入隊式も終わり、大隊本部の在る十カ城を経て、第七中隊は五カ城に到着。まず入浴する。

三百人もの兵隊が入浴する風呂なるものとは？鍋で湯を沸かして水を足しながらの小さな小さな風呂、とは名のみ。でも久しぶりの楽園だった。先輩の上等兵「今日と明日はお客様だ」。今ならばそれぞれの好みのハーブ入りの入浴の筈、当時

は悪臭極まりなしの風呂の事が今では無性に懐かしい。

お客様だとの意味は、明朝は点呼なし、午前八時までの就寝許可、藁布団に毛布一枚、薄い掛け布団である。大陸性気候で夜半は温度が下がり、寒い寒いので震えながら眠る。

さあ三日目から始まったものは何？ 言わずと知れたビンタの連続である。明治以来の変わらざる軍隊教育まさに筆舌に尽くし難きビンタビンタの明け暮れに耐える。戦後出版された「聞けわだつみの声」「人間の条件」等が映画化されたり、現代のドラマ「おしん」の名場面は世界中の人々に深い魅了をあたえかつ大いなる感動をもたらしたのも、軍隊教育と全く同じなり。軍隊のみならず一般人も「人間の条件」以上の中に在り、某県では娘を売ったと言う事実もあった。

娑婆にある人間関係の諸々と何ら変わららず軍隊には軍隊の風紀があり、下級兵は絶対服従であるべし。これまた筆舌に尽くし得ぬ初年兵の「運

命」、惨めなものである。早く言えば古参兵の「玩具」と言うも過言ではなかった。例を上げるのも今更口惜しいが柱に抱き着いて蟬の鳴き真似をせよ、汚れた軍足を喰えてオットセイのように分隊全員して各班を廻って来い等々、それを楽しむ気悪な先輩もいた。

中支に見た一回の初雪

駐留地である五カ城に一度だけ三〇センチの雪が降った。つまり雪中訓練をした。一週間位で雪は消えた。教育係の上等兵が、何やら虫の居所が悪かったのか、雪の夜半に分隊全員十七人の初年兵を裸足で外に出し二時間立たされた。今思えばよくも凍傷にならなかつたのが不思議だ。教育期間中に休養日（環境の整理）と言って休日である。それは四月二十九日の天長節。禪一本で笹舟に乗って洗濯をしていたら、敵兵のチェッコ銃射撃を受け、一人の戦友が大腿部貫通をした。全く油断も隙もない。敵は日本軍の休日を覚えており

常に悪戯をする。

入院

張り切っていた私も風土病、熱帯熱に罹り、遂に入院する羽目となった。四二度の高熱を繰り返して心臓脚気を併発した。足が上がらない。歩行もままならず、残念だが野戦病院に入院。ただ一日も早く原隊に復帰したいと願うのみだが、二カ月の入院を余儀なくされた。

この野戦病院とは小学校の講堂のような大広間に何列にもベッドを並べただけの病棟である。そして絶対安静なりの診断が下がった。まず絶対安静の患者に必要な便器とは今の酒の一升瓶のことで、ゆえに病兵は上手にこれを取り扱わなければならない。お互いに病む兵も、看取る看護婦も、共にうら若い者同士の間関係の中に痛感したものは、砂漠のオアシスである。地獄で仏に、全く文字通り言葉通りに「白衣の天使」との出会い。野戦病院の看護婦さんの甲斐々々しくも明るい。

く優しい看とりの下に、お陰様で二カ月後に全快、原隊復帰となりました。赤十字看護婦と言うイメージの蔭に隠されていた御苦労、御心労に改めて感謝するのです。

生きている限り人間一寸先は真の闇

全快、原隊復帰への喜びはほんの束の間、数日後に待っていたものとは思いつつ毎に、当時の悪夢のごとく、私を待ち構えていた物とは、分隊長の命令。「若林来い」。ビンタビンタ、またビンタの仕打ちの連続。何発やられた事だろう、理由もないままに。分隊長の平手が痛くなつたのか、拳骨で殴るは、殴るは、鼻血は出るは、前歯がぐらぐらになって歯茎からの鮮血がしたたる。今度は鉄鉋スリッパで叩かれ、その中、失神状態の狭間の中ふと脳裏をよぎったものは両親の顔、顔、こんなことを両親に見られたくない。

見せたくない。兄弟、姉妹の顔が目の裏を掠める。親が見たらどんな思いに悲しむだろうと

——。地獄絵図のヒーローさながらの思い。全く身に覚えなきこの仕打ちが判明したものは。——同年兵のいわき出身の船員に、特に悪質な兵がいた。

彼も入院し一足早く帰隊したらしい。当時そんな事は全く知る由もない私、会った事もない兵なのに一選抜上等兵の決まる直前である私を誹謗中傷の結果と知った。その内容は、若林の野郎は病院の神様になり、病院に長くいる事を喜び、後送されることを望んでいる、云々と。これを中隊中に悪宣伝したのを小隊長はじめ分隊長も、それを信じ、不心得者にされ、半殺しにあつたのである。軍隊とはこんなものと泣き寝入りせねばならなかつた。

彼は上等兵に先になり私は外された。兵器小銃を貰いに兵器係に行けばお前に鉄砲はやらないと、銃剣なくて勤務につく事もできない。私は自決する意を決めた。そんな気配を感じてくれた星善富伍長が、私を軍隊調で励まし慰めてくれた。

「お前は正直者だ、自殺等を考へては駄目だ。若林、揚子江のような大きな気持ちをもて」と。その言葉に感銘を受けて立ち直つた。

いつの世にもいる善人と悪人、これが人の世の常なりと心に聞かせ、何にも役に立たない自殺をする位なら、意のままの戦闘ぶりの結果、名譽の戦死をして本望となすの意を決した。そして思いこもごもなる中に男泣きに流した涙と、兵たりし事への雄たけびにも似た高泣きをしたのは、四年間の軍隊生活で後にも先にもあの一回だつた。

「齒を喰いしばれ、兩足を開け」と兵を思う存分叩いて、満足して止めた分隊長。労わつてくれた他の分隊長、全く対照的な人柄である。その時勞つてくれた星伍長は戦後の戦友会に逢う事もなく、復員後体調を崩し他界されたとの事、静かに御冥福を祈るのみである。軍隊とは運隊とか、金鶏勲章土手の蔭で、貰つた以上の働きをしても外され、大した事もしない人が貰う、まさに正か邪かの判断に苦しむ。それが当時の軍隊、運隊なの

だろう。苦しめられた班長にも慰められた班長とも、戦後再会するチャンスもないままに刻は流れ去った。

巡り来る思いの中に

中支揚子江の中流、宛市という小さな町の事だ。この地で敵襲は三回位あった。初年兵のT君は分哨勤務中の立哨時に居眠りをしたことが見つかり、またまたビンタビンタの繰り返し、あげくの果てに一晩中（明朝）の立哨の命を受けた。他の兵は三十分おきにTを監視する事になった。同郷の会津坂下町出身の戦友が見に行った時は、手榴弾の安全ピンを抜いて自決しようと思ったが思い止まり、元に戻すのにどうしても針穴のように小さな穴に安全ピンが戻らないので、一晩中骨折ったと語っていたという。

夜明け方「ビューン！」という爆発音がした。

それ敵だとばかり歩哨の位置を見る。揚子江堤防の下の廃屋の瓦が散乱している窪地でT戦友はの

た打ち廻っていた。腹に抱けば一発で自決できるのだが、足元に投げたので破片が無数に軀にめり込んだため半狂乱の態だった。自分の分隊長を呼び捨てにし「星伍長、早くタンカを持って来い」とどなっていった。夜は明けた、タンカで五里位後方下流の大隊本部に輸送した。軍医は大隊に一人いるだけである。輸送または手当の甲斐も空しく命果てたと後で知った。

大隊本部には兵隊が菓子工場を作り饅頭（マントー）を蒸していた。本部に毎日交代にて連絡に出され、その兵隊に儲備券にてマントーを買ってもらうように頼んだ。ところが往復十里の道を炎天下歩くのでマントーは悪くなり酸味の上に糸が出る始末、それでも食べたくて何個も食べたものである。あの美味しかった事と腹もこわさなかった不思議は何だったのか。それは、金では買えぬ「若さ」なのだった。二度とない青春をただただ惜しみながら、この我が執るペンは苦しく切な

かった思いに逆戻りする。

いわき市出身のM君は私より半年遅く入隊し、年令は三十歳、未教育補充兵で妻子もあつたとか。炎天下の南支の行軍、進軍中に赤痢に冒され、小便一丁、糞八丁、と追いつくには時間を要する。彼は軍袴に包んだまま進軍した（湘桂作戦中）。草木も眠る真夜中十二時頃に大休止（三十分〜一時間）。その時悪臭がする、「誰だ！」と分隊長の大喝一声にM君はさすがに「自分でありません」と言えなかつた。「全員軍袴を解き、下げろ」と後に廻つて臭いを嗅ぐ。「貴様！」と怒鳴つて、M君の下顎を銃把で一撃、赤痢患者であるその上、下顎複雑骨折で食事できぬまま、あれこれと苦しんだ結果に亡くなつた。私は半殺しから復帰したがM君は殺されたと言う、この事實は悲しき苦しきの中に私が証人となり証言するのである。コレラ、チフス、赤痢等々の病を救う薬剤もないのが戦場なのである。

続いてまたまた三人目の半殺しの事実を。広西

省の奥深く潜入した峠の分哨に、福島市駅前近くの常連寺という寺の住職、T氏。彼はM君と同年代である。同じく分哨についた時、顔面ひよつとこ面のごとく腫れ、歪み、蒼白疵だらけにされた。彼は動作が緩慢だと、そのみの理由にての半殺し同様。体は小さく、所詮はお坊さんであり兵隊の勤務に馴れるまでは少々無理だったのかも知れないが、一生懸命に人並みな兵隊になろうと努力しているにもかかわらず、毎日がビンタビンタの明け暮れにつぶやいた言葉は「これでは、教育とは言わないよ」と。

分隊長入院が報じられた。私も半殺しにされたが一度病院に見舞つた時は兵隊をいためつけた時の面影はどこへ、見る影もなくやつれて哀れ至極だった。戦後の戦友会にも一度の参加もなく消息不明である。

「鳥のまさに死なんとするやその声悲し」と、また人のまさに死なんとするやその言う所よし、と。私は現在八十二歳、この身にいつ異変がある

うとも不思議でない年令に達した。過去の従軍中の思い出を辿る時、善悪と愛憎を度外視して、とりとめもなき我が従軍記の一端を書いて見たかったのです。

叩き続けた分隊長は胸膜。今では「肋膜」との事とか。弱い者をいじめた教育の中にあつた戦争とは？ 本当にナンセンスな事だったような気がする。数々の弱者を泣かせ、死に至らしむるを見て、見ぬふりをしていた当時の指揮官の心を測りかねるものがある、ただ国家のためにと虎の威をかたる狐の輩も軍隊内には存在していた事を申し上げる。

湘桂作戦金魚石中家分哨の死闘

岳州に集結した部隊は進撃準備完了。昭和十九年五月二十七日未明、堰を切つて雪崩のごとく進撃を開始した。手合わせに分水嶺にて敵大軍と交戦、八斗嶺の岩山を越えて蔣埠江の対岸に出る。蔣埠江の敵前渡河の命令を受けた。会田小隊は敵

前偵察のため山に登る。向こう側の山には中国軍の指揮官か、一声、二声山合いに鈺する甲高い声に交わり、仏法僧の声なのか深山幽谷の闇の中に不気味に聞こえる。頂上に達しない中に小隊引揚げの伝令と共に山を下る。

早朝、まだ暗い中、工兵隊、重火器の援護により敵前渡河を行う。この戦闘で松崎貞一軍曹戦死、藤田進一等兵、渡河中濁流に吞まれ流死す。

六月十六日夕方、金魚石と言う集落に到着。この日はどしゃ降りの大雨の中の進撃で、水田は水が溢れ小路は川と化して流れていた。平林大隊長は馬上から降り、鈴木中隊長と地図を広げて何やら打ち合わせをしている。この山を越せば中国軍の大部隊が集結している。分哨の位置を示す我が第七中隊は尖兵中隊となり進撃しつつ宿営地に着いたのである。

第二小隊は平屋の民家である。直ちに東方の小山に登る分哨が伝達された。分哨長中家玉夫軍曹、擲弾筒手・鈴木勝正、弾薬手・四家清雄、軽

機射手・若林保、弾薬手・佐藤善男、小銃手・丸山、草野、以上七人山に登る。途中民家を手当たり次第家探しをし、私は鶏卵二個を見つけて鉄兜の中網の中に入れた。各自それぞれ何かを探したようだ。

歩哨勤務割だが、私はこの前立哨したばかりで今日は立哨の番になっていない。(戦友会に集まった中で語れば、金沢重夫氏は、自分が立哨する番で軽機射手として登る事になっていたと言ふ)。分哨長中家軍曹もこの前立哨したばかりである、と不平を言う。中家氏は軍の編成替えによって歩兵第六十五連隊に南方より転属となり入って来たばかりで、未だ中隊には馴染みが薄かった。和歌山県出身と聞く。軍隊は(運隊)勤務割も生も死も運不運はつきものである。とにかく東山小山の頂上に向かって登った。

頂点に達した時、瞬間驚いた。手頃な石二個を並べ側には家鴨の羽が剥いてあり、石は黒焦げ、未だ下には火の粉が残り家鴨を焼いて食べたあと

らしい。我々一行は現地住民でもいたのか? と
思い、別に本隊に連絡もしなかった。このような事は到る所に存在する民兵が、銃を持って警戒しているのが珍しくもないことであるが、この場合、正規軍の歩哨であったのかも知れない。空は曇っていたが雨は止み、夕暮れの山頂は何とさわやかでしばし郷愁の念にかられた。左山の下は川幅二百メートル位の濁々たる緑江がどす黒く不気味な音を立てて流れていた。この日に限り銃声一つしない。無風状態の平穏な中にもなんと怪しげなる戦地の黄昏時であった。夜半中国軍の大軍に密かに包囲されるとは神ならぬ身の知る由もなかった。

我ら兵士は平然として歩哨についた。徴発した鶏卵をすすりながら故郷を偲び、空腹なる時はつき立ての餅を腹いっぱい食べた話をし、喉を鳴らし、故郷のお盆の季節である盆踊りの事など語りながら夕食の飯盒の到着を待つ。それが待てども待てども届かぬ。兵達はイライラし出した。歩哨

の夕飯は忘れられたのかと思った位であった。午後九時過ぎ、伊藤源七を先頭に初年兵二人を連れて松明を灯して登って来た。暗雲漂う闇の夜である。

「御苦労さん、遅くなりました早く食べて下さい。初年兵に届けさせたのだが道が判らず戻ってしまったので私が来ました」と言う次第。初年兵は異口同音に「分哨、御苦労様で有ります」と彼らは言う。時の過ぎた中国のラーメン、水分一つなく膨れるだけ膨れ飯盒の蓋が飛び上がっていた。だが空腹にはまずい物なしと喜んで食べる。約二十分位の食事の間であるが、思い思いの語らいの一時が楽しい。伊藤氏一行は引き返した。前夜半は車座になって七人は語り合った。低い山なので夜来の雨と蒸し暑さのため藪蚊の攻めに会う。びしょ濡れの上衣や靴下をしぼり乾かして天幕をかぶり眠る。夜半、六月十七日、午前三時頃、密かに包囲網を縮めた中国軍は立哨中の佐藤善男一等兵を狙撃する。銃声一発。途端の叫び。

「やられた！ やられた、衛生兵！ 衛生兵！」
とみんな待機の間より十五メートル先である。「アッ、敵だ！」とばかり、ガバツとはね起き戦闘配備に着く。

負傷した佐藤一等兵を草野一等兵が担いで山を降りた。軽機、弾薬囊は佐藤氏が立哨した場所に置いたままだ。敵兵が近くて取りに行けない。小銃手の弾を集めて猛射する。敵と味方の打ち合いは漆黒の闇にとどろき溪谷にこだまする。

少数の分哨を大軍をもって密かに包囲した中国軍は、少数と見ると俄然攻勢に転ずる。だが敵も慎重だ。孤立無援の我が分哨を四、五人とは思わないだろう。多勢に無勢、我が分哨は突撃されたら一たまりもない。無我夢中の防戦、敵の手榴弾は所かまわず周辺に炸裂する。「駄目だ！」と一瞬死を覚悟する。だが天の助けか不発弾多し。

戦闘最中に古参兵の鈴木上等兵が、分哨もたないから中隊に応援を頼みに行くと言って山を降りて行ってしまった。最も頼りにしていた擲弾筒

手に戦列から抜けられては心細い限り。弾薬少ない軽機一丁だ。小銃手より弾を集めて撃ったが残り少ない。敵は肉迫の気配。その間五十メートルか、身の毛もよだつ思いとはまさにこの事である。

いよいよ接近戦だ。私は連続転射で撃つ。敵の銃弾は山頂の一員に集中する。当たらないのが不思議。四家一等兵は、うようよする敵を目前にして進むこともできず、ただ大声で「ヤア！ ヤア！」と喚声を上げるのみ、威嚇しようと思ったのか、何なのか正気の沙汰ではなかった。

分哨長、中家軍曹は「声を出すな」とも言わない。そのうちに四家一等兵は尻に破片が当たったと言つて一人で山を下りて行ってしまった。残るは弾薬尽きた軽機を頼りに、中家分哨長と、私と初年兵の丸山。「若林どうする」と声をかけられた。ちょっと姿勢を稜線に出した瞬間「やられた！」の一声。十メートル位離れた所、丸山が岩石を近づく敵に投げる。手榴弾と思ったのか敵の

射撃は一時止んだ。

その機に中家分哨長を担いで二十メートルばかり移動した。敵は分哨に群がる。我に気付かず日本兵の遺留品をさも珍らしげに水筒を肩に掛ける兵、天幕を煽る兵、鉄兜を手にする兵、敵は次々と姿を増す。我々に気付かない。その間に五十メートル、七十メートルと敵との差を広げた。

中家分哨長の身体は未だ温かかったが、呼吸の有無を確認する暇等はない。援軍到着の気配なし、丸山と代わる代わる中家分哨長を担ぎ、軽機を担ぎ小銃を手にして必死で山麓に辿り着いた。南支に茂る夏草は茫々とし一メートル位伸び、朝霧深き明け方ようやく援軍と顔を合わせたのは午前六時頃である。太陽が昇り始める時、中家軍曹の魂は静かに昇天したのであった。

慰問団へタイムスリップして

入隊して間もなく昭和十八年二月頃に戦地に慰問団がやって来た。「誰か故郷を思わないか」「湖畔

の宿」その他の歌謡二時間位であつたらうか、しばし青春と古里を恋うるやすらぎの気分になり、勇氣百倍して軍務に精励していった。

また故郷の夢を見た。明日も同じ夢でも良い、夢の続きを見たいと願いながら床についたものである。戦地に行つて三カ月位経つとホームシックになるものである。無性に故郷が恋しくなるものである。

江北殲滅作戦、昭和十八年五月六日。そして江南殲滅となり浣市に入る。浣市は北にとうとうとして流れる大揚子江があり、南に大きなクリーク（小川）があり天然の要塞である。六月頃に警備地を交替した。敵はこの要塞を奪還すべく何回となく浣市を包囲し、奇襲、夜襲が繰り返された。八月頃に敵襲があり月提分哨（浣市より二キロ位下流）に十五人の分哨が出されていた。この時、同年兵稲田敬二一等兵が重傷を負つた。

分哨を援護のため一個小隊を編成して、揚子江の右岸を這うようにして分哨近くに迫る。敵兵は

堤防上よりチェッコ銃で盛んに撃ちまくつていた。それとばかり十一年式軽機二銃を据えつけて一斉射撃をする。敵は一斉に退散した。分哨に辿り着いた時は松崎軍曹以下十五人は何倍もの敵兵に包囲されて血の気も失い右往左往していた。稲田敬二一等兵は腹を撃ち抜かれて唸っていた。二キロ上流の中隊にまで担ぐ途中タンカの揺れにゆさぶられ彼の腸が飛び出し唸って苦しむばかり。患者へ元気づける言葉も、慰め励ます言葉の術もなかった。応急の手当には三角布を当て、巻脚絆にて胴腹を巻いただけである。

中隊医務室には、深谷衛生兵、兵長が待っていた。この時の包囲で浣市を守っていた兵隊にも、五人、六人の戦死者が出た。稲田一等兵の近くにいた兵はいないか、と言われた。言われてみると郡違いでこそあれ私が方角的にも距離的にも一番近かったので最後まで見守つてやった。軍医は大隊本部に一人いるだけ、各中隊にはいない。衛生兵が三人いた。

手当も医者のない中隊の戦傷病者は哀れで悲しい。彼は医務室の中で横になり、身内の人がいる筈もない彼と私二人きり。出血多量の彼は水を要求するばかり、私は深谷兵長に連絡をとり水を要求する旨を告げると深谷兵長は「どうせ駄目のだから、飲めるだけ飲ませるように」とのこと、コップやヤカンもない戦地である、飯盒で五合位の生水を飲ませた。

「美味しいな」と言い「もっとくれ、もっとくれ」と言うので、再度兵長に相談したら「くれてやれ」と言うので、二回目は三合位、合計八合程の水を彼は飲んだ。

中国の生水は硬質で日本のは軟水、違いがある。日本ではどこでもいつでもそのまま飲むことができるが、中国の水は必ず一回沸騰させて湯冷ましてなければ健康な人もやたら飲めない。飲めば飲むほど出血は増すばかり、そんな状態の繰り返しでは決して快方には向かわないままに午後一時頃か、意識朦朧たる中から、彼は微かに言う

「若林戦友、俺のおっか（母上）と舎弟が来る事になっているのだが、まだ見えないか？ 見てくれ」と言う。これが幻覚症状だったのか、科学では解明されない霊界の不思議か、肉親のみに通ずる事があるそうです。

祖国を遠く離れて来た異国の地に、母も舎弟も来る筈がないのに肉親にのみ通じた最後の思いだったのだろう。懸命の看取りの甲斐も空しく午後四時頃、息絶えたのです。四年間の中、死ぬまでの「縁」に付き合ったのも、私にとっては尊い出会い不思議な「えにし」と生涯、わが胸の奥底に秘めるべく戦友稲田一等兵を偲ぶ事になるだろう。

グアム島に生き残った横井庄一さん、ルバング島に残った小野田寛朗さん、終戦も知らず孤軍奮闘した心境はいかばかりかと思う時、忘れようとして忘れ得ぬあの忌まわしい戦争の記憶が走馬灯のごとく脳裏をよぎる。ふと我に返る時いつの間にか吾が齢、何と「八十二歳」。

苦しきも、悲しきもつまり戦争の影も「歲月」と言うこの文字が忘却の彼方へ静かに静かに消して行ってくれる。今まで欠かす事なく出席していた「戦友会」も年毎に出席者が減るのみである。当然のことながらやっばり淋しい。今思えば三十年前の戦友会参加者は九十人、近年の参加者は十三人、私は生命ある限り戦友会に出席し想い出話を語り続けて行きたいと念願するが、誰しも皆寄る年波には勝てずに老いねばならぬ。これが人生なのである。

「生者必滅、会者定離」戦争と言う大きな犠牲の数々があったからこそその平和を守るために、戦争を、あの戦争体験談を子から孫へと風化させる事なく語り継ぐことも生ある限りに託された我々の使命なのではなからうか。

とりとめもなき、白虎部隊従軍記の末筆に更なる祈りをこめるものは亡き戦友の御霊安らかならんことと、また桜花らんまんたる中に元気で再会できる生き残りの戦友のますますのご健勝、ご多

幸を祈って止まない。

【解 説】

体験記執筆者は昭和十七年十二月一日、会津若松市の東部第二十四部隊第七中隊へ入隊し、十二月十三日屯営出発、下関駅より乗船、釜山へ上陸後、無蓋貨車輸送で京城、奉天、山海関を経て浦口へ到着した。

南京にて再び乗船、揚子江を遡り、江西省湖口へ上陸、湖北省沙洋鎮まで行軍をした。そして昭和十八年一月十日、第四十五次補充員として第三師団第六十五連隊第二大隊第七中隊（鏡六八〇五部隊）に配属された。

連隊長・桜井徳太郎、隊長、熊谷健弥、教官・越智慎吾で、この部隊こそ、武功輝く伝統を誇る白虎部隊であった。

中国戦線に行った体験記筆者は、戦地において初年兵の教育を受け、一期の検閲を終え、各地の作戦に出動した部隊を転々と追及して沙市、浣

市、老城等へと移動しているうち、一選拔上等兵に入るといふ幸運に恵まれ、軍務に精励することになった。

ところが、思いもかけず悪性の下痢病と熱帯熱に冒されて、その上、古年兵から前歯を折る等の暴行制裁を受け、苦しく悲しく辛い地獄の日夜を送り、遂には自殺を思い、たちつとも本当に辛抱し、今日その当時の状態を思い起こしても、よくぞ頑張ったものだと同顧しつつも、悲惨なことであつた、という。

その内に病氣も直り、健康で戦友と共に中支戦線を長駆し、湘桂作戦という桧舞台に移ることになり、昭和十九年五月二十七日、江南の警備地を名古屋の部隊と交替して、十一年式軽機関銃を担い金沢上等兵とコンビで行軍した。この作戦は大陸打通作戦で、国運を賭けた大遠征戦で、武漢―長沙―衡陽―桂林―柳州―独山と、実に一四〇〇キロ余の長大距離を、ただ足だけで突破して行くかうという古今未曾有の難作戦であつた。

連日の雨に編上靴の半張も取れ、何日も靴は履いたままで足はかゆい。雨で白くフヤケル。そのうちにやっと晴れ上がり好天気を迎える。

昭和十九年六月十六日、金魚石にたどりつき大休止。

そして終戦も間近い昭和二十年七月十九日、第六十五連隊は七月十七日、桂林―興安―白沙鋪に向かい転進、敵は五旗嶺の山岳に陣どり、我が軍の撤退を阻止せんとする。山頂への攻撃は思うように進展せず、暗夜を利用して突撃を繰り返す。

体験記筆者は軽機の射手として戦闘中、敵弾により右大腿部軟部貫通銃創を負い、戦友に担送され、トラックで後送され、看護婦もない川原の砂原の野戦病院に収容された。まさに病院とは名ばかりの所で、手榴弾による自決していく傷病兵も多いなか、ただ、もう自分だけ何とかして生きのびたいと。今から考えると一体自分は、どうして生還できたのか？ 思うに父母の強い祈りによる神仏のお加護であつたらうと感謝あるのみ、と回

想する。

白虎部隊という郷土・会津若松の誇り高き部隊の中で、中支戦線の中樞を担った重要な作戦の中に身を置き、体験記の筆者は、部隊の僚友のことを回想し、戦場での戦友たちの群像を描いている。厳しい、悲惨な、そして軍隊という限られた世界の中にごめく多様な人間像、そこには自分の労苦を語る以上に、苦闘する世界の中の人間模様を語って尽きない。

「白虎部隊」郷土の部隊史はすべては、この言葉に生きており、この言葉に始まり、この言葉に終わっている。精鋭であった部隊を送り出した郷土の誇りが「白虎部隊」という言葉を冠した多くの図書の中に充ち充ちている。

「歩兵第六十五連隊歌」がある。これには、門外漢が語る以上に、「白虎部隊」の真髄と全貌を映し出している。

一 維新の華と謳われし白虎隊士の熱血を
享けし誉の武士が今 決然と膺懲の

二 正義の戦進め行く 白虎その名ぞ我が部隊
輝く御旗さきがけて上海、江陰、南京も

三 鎧袖一触大和魂 徐州大別死を越えて
曠野を圧す勝鬃譜 白虎その名ぞ我が部隊
転戦山河幾千里 征くや囊東また宜昌

四 栄えの感状幾度ぞ 軍旗に香る勲功は
御稜威と俱に輝やかん 白虎その名ぞ我が
部隊

五 噫呼この勲功受け継ぎて 御詔勅畏しこみ
つ 豪気放胆武を磨き 気魄を練りてうち建て
ん

大東洋の新秩序 白虎その名ぞ我が部隊